HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	Ambitionと「大志」(<特集>共同研究報告 ： 『国際化=異文化理解に関する方法論的研究 ： 文化障壁を緩和するための効果的施策確立に関する考察』)
著者	高久，眞一
引用	北海学園大学人文論集，4：77-93
発行日	1995-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

Ambition と「大志」

高　久　眞　一

1

Boys, be ambitious!　の訳が「少年よ，大志を抱け」と定着してから久しいが，はたして，ambitious とは「大志を抱く」ことであるのか，つまり，ambition は「大志」なのであるのか，その単語のニュアンスをうまく伝える適正な訳語となっているのか，ひょっとしたら，可なり偏った訳ではないのか，あるいは，誤訳とまでは言い切れないにしても，誤解を招くような訳語ではないのか。本論はそれらの疑問を出発点として，英語とそれに対応する日本語訳との距離を測定することを目的とする。

そのための作業手順として，ウィリアム・エス・クラークがその言葉を残したとされる 1877 年前後のアメリカで出版された英語の辞書を資料として，それらの中で ambition 並びに ambitious にどういう定義づけがなされているか，そして，その定義づけを立証するためとして，どのような文例があげられているのかを，出版された年代順に辿ってみようと思う。次の作業としては，ambition 並びに ambitious が，現代の英語国民の中にどのような語感を持つ語として受けとめられているかを指定するため，長い間，文例として確立され，人口に膾炙されている有名な引用文を点検することにする。

この研究は 1993 年度北海学園学術研究助成を受けて実施された共同研究「国際化＝異文化理解に関する方法論的研究 —— 文化障壁を緩和する効果的施策確立に関する考察」の一部である。

2

「人為的な規範によるものではなく，話されて生きた言葉に基づいて」編纂されたノア・ウェブスターの『アメリカ英語辞典』が，資料として最適であることは言うまでもない。それが，アメリカ人のその単語に限らず，英語全般に関する，イギリス人とは微妙に違った語感に基づいた定義づけや，文例を挙げているからであり，しかも，アメリカにおいて最も権威のあるものとされていたからである。それだけではなく，クラーク自身が札幌農学校で学生たちに使わせるためにと相当数の辞典を持って来たのだが，それが他ならぬウェブスターの辞典であったからである。

ウェブスターの辞典の初版は1828年に2巻本として出版されているが，ambitionの定義が次のようになされている。すなわち，「昇進や名誉への強い願望。卓越と優秀さへの強い願望。それが良い意味で使われる例として，立派なambitionから競争心が生まれるという具合である。それはまた，しばしば特定の目的を得るために非合法的な手段を用いながらの，権力や高い地位を求める，ただならぬ強い願望を意味する」とある。

この定義づけの中で明らかなことは，ambitionには両義性があるということ，つまり，良い意味と悪い意味とが背中合わせになっていることである。そして，良い意味で使われる時には，誤解を避けるためだと考えられるが，ambitionの前にその意味を良い方に限定するための形容詞，この場合には「立派な」が置かれていることが注目に値する。換言すれば，ambitionが裸のままでは，上記の定義づけの後半部分に引かれ，悪い意味に傾く可能性があるということを言外に語っている。他方，同辞典のambitiousの項目には，当然ながら，ambitionから派生する形容詞としての定義づけが簡潔になされているが，いわゆる悪い意味のそれがすっぽり抜けている。それは多分，辞典としてその語の直ぐ上に解説されているambitionの項目を詳細に繰り返すことを簡潔性のゆえに省略したものであろう。ambitionの持つニュアンスがambitiousでは断ち切られているということはあり得ないからである。ただ，ambitionの項目にのっていないのにambi-

tiousの項目にその用法の具体例が一つだけあげられてある。比喩的に使われるとして,「ambitiousな大海原」という例がそれで,シェイクスピアからの引用だとしている。言うまでもなく,海の波が逆巻いて天にも届かんばかりの状態を描写したものである。この具体例がたまたま選ばれたことに余り深い意味を求めることは慎まなければならないが,波が,つまり海水が天に届こうとすることは,宇宙の構成からして,また自然の理からして,「無謀にして僭越な」という種類のニュアンスが感得されることは否定できない。

次に,同じくウェブスターの1872年および1874年の版を検討してみよう。実は,その両者は僅か二年の差しかないので,内容的にはambitionやambitiousの項目に関しては全く変化はない。そして,大事なことは,この辞典がクラークが札幌農学校へ持って来たウェブスターの辞典に,問題とされている語の定義づけと,ニュアンスを伝える具体例とに関して同じだと判断してもよいということである。ちなみに,クラーク持参のものとされるウェブスターの辞典は,発行年の印刷されてある初めの数ページがすべて失われていて,確定することができない。学生たちによって余りにも頻繁に使われたせいであろう,残っている初めの部分もよれよれになっている。

さて,1872年と1874年出版のもののambitionに関する定義づけは,上記の1828年のそれと比較すると,悪い意味で使われるという説明が無くなっていることに気づく。「昇進,名誉,優越性,権力へのただならぬ強い願望を時として意味する」旨が記されている。しかしながら,1828年のものには無かった用法の具体例として,シェイクスピアの『ヘンリー八世』からの引用がある。すなわち,「クロムウェルよ,ambitionを投げすてるようにお前に命ずる。その罪によって天使たちは堕ちたのだぞ」というのがそれで,上の定義づけに落ちている悪い意味を補って余りある具体例だと言わねばならない。この引用は同作品の三幕二場で枢機卿ウルジーが失脚して野に下る際に部下のクロムウェルに言う台詞からとられたものであり,文脈の上から言って,このambitionは「野心,野望」以外の何もので

もない。「天使が堕ちた」という文の背景には，新約聖書のヨハネ黙示録の12章に記述されている，一部天使たちの神への反逆による戦いと，ミカエル等によって天上界を追われ，地に投げ落とされて悪魔と化したのだということとがある。聖書がその文化醸成の基礎，動因となっている欧米での倫理体系にあっては，ここで触れられている神への反逆以上の悪は考えられない訳で，したがって，ambitionの持つニュアンスがいかに決定的に悪いものかは容易に確定できる。

他方，ambitiousの項目には，定義づけは本質的には変わらないにしても，その用例が1828年の「ambitiousな大海原」とは一段と違った次のようなものが挙げられている。すなわち，これも同じく，シェイクスピアからの引用であるが，「しかし，シーザーはambitiousであったとブルータスは言われる。そして，ブルータスは高潔の方でございます」と。これが，この項目の唯一の引用例ではなく，「このような儀式を見たいほどにambitiousではなかった」とか「巨大な像がそのambitiousな台座から押し倒された」といったものがあるにはあるが，ここでは特記に値するものとは考えられない。

上記のシェイクスピアの引用の持つ響きを正確に聞きとるためには，それが『ジュリアス・シーザー』中にどういう文脈の中に発せられた台詞であるかを確認する必要がある。言うまでもなく，この引用は同作品の三幕二場におけるアントニーの演説の一部で，その演説が余りにも見事で，余りにも有名であったので，ここでの引用となったものであろう。ブルータスの主張として，シーザーはambitiousであったのだとアントニーが言っている背景には，ブルータスのシーザー追悼の演説があり，その中でブルータスはシーザー暗殺に関する自己弁護の根拠として，「シーザーはambitionを抱いたのだ，それゆえに私は彼を刺さざるを得なかった」とか「シーザーのambitionには死をもって報いるほかなかったのだ」とローマ市民に向かって訴えている部分が置かれている。つまり，ambitionにはローマの栄光ある共和体制を崩壊させ，自らがローマの独裁者たらんとする「野望」の意味がこめられている。かくして，ローマ市民の自由を奪うことに

なるのだから死に値したのだというのがブルータスの主張である。引用例としてのアントニーの演説の一部におけるambitiousは，そのような意味のものとされている。アントニーの意図は，シーザーがいかにambitiousではなかったかをローマ市民に察知し，認識してもらうために，アイロニーという巧妙な手段を駆使して訴えることにある。「ambitionは死に値する」というブルータスにアントニーは全面的に賛同していること，したがって，用例の中のambitiousの持つニュアンスがそれから派生したものであることは自明の理である。

次に，クラークのambitiousたれと言った時から約20年後のウェブスターの流れを汲むニューヨーク出版の『標準英語辞典』をひもといてみると，ambitionの定義づけに微妙な違いがある。すなわち，1872年や74年のものと違って，ambitionの目ざすものとして従来のものに「地位，武勲，文学上の名声または富」が追加されている。また，追加の説明として，「ambitionを構成するものとは，名声への飢えと権力志向とが組み合わされたもの」というマコッシュの著書『原動力』からの引用と，「ambitionを軽蔑することを自らに鍛えよ。それは熱情の中で最も卑しいものの一つなのだから」というノルドホッフ著『神と来世』からの引用がある。

同辞典は，上のような否定的な側面をあげた後で，次のように，その良い側面をも取りあげている。その定義として，ambitionとは「何か立派なこと，あるいは，それ自体正しいところのことを達成しようとする熱烈な願望とか，着実な目的意識のこと。例えば，自らの性格や能力を高めようとするambitionという場合のように」とし，次にあげる用例がそのあとに続いている。「人を悪徳からそらすために考えられる中で最も効果的な方法は，より高いambitionに向かわせることだ」という，レキー著の『ヨーロッパの倫理観』からの引用と，「われわれは，人生におけるあらゆる職業に，知性への誠実なambitionを吹きこむように努力しなければならない」というビーチャー著の『若き者たちへの講話』からの引用とがあげられている。

この辞典のambitionの項目には，その定義をさらに明確にするためで

あろうが，次のように，同意語としてのaspirationをあげ，「Aspirationは純粋で単純な卓越性への強い願望をいう。Ambitionとは，文字通りには，投票を懇請するためにあちこち歩き回ることを意味し，賞与とか他人からの承認と第一義的に関係する。aspirationが得るものは美徳，高貴さ，技術や他の高い特質であるのに対し，ambitionに与えられるものは昇進，名声，名誉などがある。高貴で賢明なものもあるし，下劣，利己的，あるいは有害なambitionもある」としている。

次に，1910年発行のウェブスターの辞書のambitionの項目に目を転じてみると，定義づけの後の引用例に次のような追加がある。すなわち，「わたしの王冠，わたし自身のambition，それからわたしの王妃」というシェイクスピアからの引用である。具体的には，作品『ハムレット』中の王位簒奪者デンマーク王クローディアスの台詞で，ここでのambitionは，正当な王，つまりクローディアスの兄に当たる先王ハムレットを暗殺したことを，つまり悪逆非道の行為を指していて，ambitionの持つ否定的なニュアンスを揺るぎなく確立している。

さらに，1896年発行の上掲の辞典に従って，aspirationとの比較が次のようになされている。すなわち，aspirationが良い意味に限られて使われるのに対し，「ambitionはその目ざすものとして，個人の前進，昇進があり，賞賛に値することもあれば，時として法外なものもある。例えば，名声へのambitionとか，地位を得たい，富を獲得したいというambitionがある」とし，その後に「余りにも高きambitionのゆえに，しくじってしまう」という，またしてもシェイクスピアからの引用があげられている。これは『マクベス』からの引用で，マクベスが一幕七場，つまり作品中早い段階でダンカン王殺害と王位簒奪の決意をambitionという語に込めて独白している箇所である。その語の持つ，あるいは持ち得るニュアンスを明確に色づけていて疑問の余地がない。

3

以上がウィリアム・エス・クラークの生きていた時代に比較的近い時代に巷間に流布されていた権威あるアメリカ英語辞典の示すambitionの定義とそのニュアンスである。取りあえずの結論としては，その語は語源がラテン語で，政治上の地位を得るために候補者が投票してもらうべく，「あちらこちら回る」ことを意味したことから，その語の根底には，他人の評価を得ようと努力すること，世人から賞賛を浴びようとする，いわゆるこの世的な欲望と努力とが据えられてある。つまり，横の関係，相対的な価値追求があるだけで，絶対者との縦の関係，神との垂直的な関係は，その語の基底には欠けていることが第一にあげられる。第二には，その語は両義的に使われていたこと，「あちこち回り歩く」という努力の対象によって，良くも悪くもなり得るというのが前提ではあるが，シェイクスピアの作品のその語の使い方が余りにも人々に忘れ難くも印象深いことからであろう，その語の定義づけが冷静で客観的になされているにも拘らずその語の使用例が，ほとんどの場合，極めて否定的な意味で使われているため，その語のニュアンスが悪いものに傾いていることは否定できないということである。言いかえれば，シェイクスピアがその語に感じとっていたニュアンスが，その語の歴史的な歩みに可なり決定的な影響を与えているということが分かる。辞書の編纂者にとって，ある特定の語の有名な使用例がふと念頭に浮かぶ場合に，その語に付加する具体的な引用こそが，定義づけを超えて，その語のニュアンスをひとつの息吹きとして伝えてくれる，つまり，その方がもっと生き生きとした定義づけとなっていることが多い。第三に，ambitionという両義的な語を解説するのに，類義語としてaspirationをあげて，その両者のニュアンスの違いを扱い始めたことの中に，先に述べたようにambitionが上なるものとの縦の関係性を全く欠いていることへの不満が次第により強く感ぜられるようになり，絶対者との垂直的な関係性とその価値とがより強調された19世紀的思潮の流れを読みとることが出来ると思う。ambitionは両義的ではあるが，aspirationと比較す

ると否定的な側面があるのだということを明確に記述することが必要とされたのであった。したがって，両義的ではあるが，良い面よりか悪い面の方が，先に触れたシェイクスピアからの引用例の多いことからも分かるように，次第に大きくなって行ったと解釈できる。

4

上述のように両義的な，あるいは多義的な語が，ウェブスターの辞書編纂の時から150年をこえる歴史の歩みの中に，アメリカという広範囲にわたる各地域でどのように推移して来ているかを調べてみようと思う。それらの推移と変化とは，その語の持つニュアンスの可能性の具体化を示している訳で，言わば，その語の実体を拡大して見ることになると考えられるからである。

その資料として恰好な辞典がある。1985年発行の『アメリカ地域英語辞典』がそれで，地域別に多岐に分かれたこの語のニュアンスを歴史的に数多くの引用文を通して示しているので，大変参考になる。

その中のambitionの項目に，主としてアメリカ中部大西洋沿岸，新開地地域のambitionの定義を次のように解説している。すなわち，「悪意，復讐心，憎悪，短気」と同義語だとしていて，具体的な用例をあげ，1826年当時には「Ambitionとは悪意を表現するのに使う。ambitiousな人とは普通の口調で復讐心のある人を意味する。1829—30年当時のヴァージニア州の使い方として，ambitionとは『意地悪』のことで『彼はambitionのために私に対して訴訟をおこした』と。1859年の用例として，北カロライナ州では，この語は『恨み』の代わりに使われていて，『私はあの男にambitionを抱いていた』と」。辞書の編纂者が「この種の用法は教育ある人々も使っていたと，信頼すべき情報として聞いている」と付け加えている。1901年に使われた用例として，「友人たちがある男に復讐するようにとしつこく迫ったのに対して，ある女が止めて欲しいと言い，『あの男にambitionの気持ちを起こさせるだけよ。悪いことは止めてよ』と言っている。1903年

の例として,Ambition は敵意を意味し,『彼は私に何年にもわたって ambition を持ち続けていた』」とある。さらに「1950 年の用例として，その語は短気」だと締めくくっている。

次に ambitious の項目については，その両義性が明確に分かれた場合として，別々に分類して，アメリカ中部と南部で第一に「人や動物に関して，活発な，荒っぽい，悪意のある，怒っている」という定義づけをしている。その用例として,「1853 年ケンタッキーで『喧嘩のせいで彼は山猫のように ambitious になった』と，この語は西部では口調として『悪意のある』という意味である。1854 年の用例として,『彼はインデアンとか馬を相手とする時は別だが,決して ambitious な人ではない』。1859 年の用例として Ambition は『怒っている，激怒している』という意味で，ジョージア出身の者が『おれはひどく ambitious になっていて，鼻息荒く呪いちらした』という言い方をしている。西部でも同じ意味で使い,『ambitious な馬』というと火のように手におえない馬のことを言う」とある。

第二の分類として「エネルギッシュな，生き生きしている」と定義づけ，主として中西部や北部から西海岸に亘っての使用例が次のようにあげられている。「1889 年のマサチュセッツとコネチカト地方では，その語は，人間に関してはエネルギー，勤勉さ，道徳的価値，動物に関しては良い点を伝える。1901 年でのニューヨークの用例で，ambitious とは勤勉であること，1909 年の北西部の用例として,『ambitious という語の使い方には，南部にその類例がない。古い意味で「元気だ」というのを別にすれば』とある。1917 年の用例として「ambitious とはエネルギッシュで勤勉であることを意味し,『私は今日は余り ambitious ではない』という風に使う」と。さらに，その種の用例が 960 年，1965—70 年，1973 年のものとしてあげられている。

以上のことから，ambition という名詞の場合，その両義性が失われ，その語の持つ悪い面だけが表面化して現在に至っていることが注目される。それに対し，形容詞としての ambitious の場合には，その両義性が保たれているのは興味深い。ただし，ウェブスターの辞典に示されている，主流

としてのその語の定義，つまり集中化させて標準的な定義づけをしたのとは違い，ここで検討している『アメリカ地域英語辞典』では，その語の持つ拡散化の跡を辿って記述したものだけに，非標準的なもの，異例なものをも積極的に収録したものと考えられる。それなのに，ambition の意味が揃いも揃って否定的なニュアンスだけを持続的に保って来ているというのは，したがって特記すべきことだと言わなければならない。その語を辞書的定義づけから解放して，人々に自由勝手に喋らせることによって，その語の本質的な側面がより鮮明に展開すると言えるであろう。Ambition の持つ両義性は実は悪い意味という一義性に大きく偏っていた語だと判断できるのである。

5

次に，ambition や ambitious が，アメリカという地域を超えて，一般の英語を母語とする諸国民にどのようなニュアンスの語として受け取られているかを検討してみよう。そのための一つの手懸かりとして，最も権威のあるものとされる『オックスフォード引用文辞典』を調べてみようと思う。その辞典には Ambition の項目に 23 の引用文が収録されている。この辞書の編纂方針として，ただ単に，文中にその語があるから引用文としているのではなく，多くの人々の口にのぼり，多くの著作なり他の印刷物にしばしば引用されることから代表的な引用文として収録されていることを考えあわせると，その語が持つニュアンスを知る上では信頼に足りる資料だと言えよう。さて，ambition の 23 例の中で，フランス語からの翻訳文の一例を除外すれば，22 例となるが，その中の 16 例がこの語を悪いニュアンスのものとしている引用文である。しかも，他の例には善悪いずれでもない，中立的なニュアンスを伝えているものが，ほとんどである。他方，ambitious の場合の 6 例の引用文中，4 例がその語の否定的なニュアンスを響かせている。内訳を見れば，ambition の引用文 22 例中，10 例が，また ambitious の 4 例がいずれもシェイクスピアの作品からのものであることが特

徴的なことで，シェイクスピアの語感として，これらの語に関しては，例外なく悪いものとされていることが，その使用例が名文であるだけに，いかに支配的であるかを知らされる。

6

ambitiousに相当するとして「大志を」抱くという訳語が定着したのは，昭和12年，つまり1937年に札幌農学校の第一期生の一人であった大島正健がその著書『クラーク先生とその弟子』を公けにしてからであろう。大島がその中で「青年よ汝等は常に大志を抱き，国家有用の材たれよと先生は青少年に呼びかけられたのである」と述べているのが，その訳語の定着化に決定的な役割りを果たしたと考えられる。何しろ，大島はクラークから直接，別れの言葉としてのambitiousを聞いた当人なのであるから，その訳語が直ちに権威あるものとして広く受け入れられる様になって行ったと考えられる。

大島以前には，訳語としての「大志」は少なくとも印刷された資料としては残っていない。訳語としての「大望」というのは，それより前，1894年の札幌農学校の学生・安東幾三郎が『蕙林』第13号に「ウヰリヤム・クラーク」と題して寄せた一文にのっている。「大望」という語が，日本語として遥か昔に定着していたことは『日本国語大辞典』(小学館，昭和56年)からも知られ，1603—04年の『日葡辞書』に収録されてあると記している他，それ以前の『文明本節用集』にも使用例があるとしている。したがって，1894年当時には「大望」という語が日本語の文中に極く自然に収まっていたのは言うまでもない。それが，大島訳の「大志」となるまで実に40年以上の時の流れを要している。その間，大島が「大望」に不満を感じていたことは容易に想像できるが，どのような機会に，「大望」を「大志」に代えようと思いついたのかは知るよしもない。しかし，「大志」は「大望」の改良版として考えつかれただけに，ambitiousから「大望」を導いた安東幾三郎の功績こそ大いに讃えなければならないと思う。大島自身はambi-

tiousという語を「功名を立つ」という風な意味に受けとめていたことが，その時の感慨を込めて唱った漢詩の中に読みとることができる(『クラーク先生とその弟子たち』p.123)。

「大志」という語が1894年当時，安東によって思いつかれるはずがなかったことは確認しておかなければならない。先にもあげた『日本国語大辞典』が収録している「大志」の項目には，1871年に初出として『西国立志編』(中村正直訳)をあげ，その次に福沢諭吉の『文明論之概略』をあげている。後者の出版は1875年であるのをみると，「大志」が1870年代から少し宛，日本語として「市民権」を得始めたばかりの新語であったことが分かる。その傍証として1896年発行の『和英大辞典』(エフ・ブリンクリー，南条文雄，岩崎行親共著　三省堂)中にTaimoつまり「大望」があるのに，Taishiとしては「大使」，「太子」，「太史」があるだけで「大志」がないことがあげられる。1896年に未だ和英大辞典に収録されていない程に，「大志」は日本語として熟成していなかったのである。

7

「大望」と「大志」とはどのように違うのか。『日本国語大辞典』は前者の定義として「大きなのぞみ。野心。たいぼう。」をあげ，後者については「将来や未知のものに対する遠大な希望。大望。」としているだけで，両者の違いを知る上では全く役立たない。

「大志」が持つ，語感としての清々しさ，爽やかさ，清廉潔白さ，高揚感といった類いのものは，「大志」の元になっている「こころざし」に由来するものであろう。「こころざし」ともなると，本来の日本語だけに，上掲の『日本国語大辞典』もまことに雄弁で，昔からの多くの引用文をあげながらの定義づけが詳細を極めている。その中で「大志」を「大志」たらしめている「こころざし」の定義は，「高潔で，むやみに変わることのない気持。高尚な精神。志操。」，「目的をはっきりとさだめ，その実現のために努力しようとする気持。」，「失敗などしないように注意を集中させること。念を入

れること。また，気を配る心。」．さらに「信心や，芸道をめざす気持のあついこと。信仰・修行の方面でつとめはげむこと。」等を初め，他にも数多くあげられているが，いずれも例外なく，良いもの，評価すべきものとしている点では少しの揺るぎもない。

8

ここまでの考察の結果，be ambitious または ambition が「大志を抱く」ことといかに意味的に，ニュアンスの上で，距離があるかがおのずから明白になったと思う。

「青年よ，キリストを求めんと，望みを高く持て」,「青年よ，人間として当然なすべきことをすべて達成せんと望め」,「青年よ，金，利己，はかなき名声を求むるの野心を燃やすことなく，人間の本分をなすべく大望を抱け」(ジョン・エム・マキ著，拙訳『クラーク，その栄光と挫折』　北大図書刊行会　1978年　p.242)といった，クラークのメッセージの補筆改訂版が出たということ自体，be ambitious とか ambition の本来の語感を正確に実感している人々にとって，そのメッセージが，日本の青年たちに与えられるものとしては，そのままでは大いなる誤解を招くことになることを懸念した結果だと言える。特に，上記の三番目の改訂版が北大（当時は東北帝国大学農科大学）の予科教師ポール・ローランドというアメリカ人によって1915年に提案されたものであることは意義深い。アメリカ人として，英語を母語とする者として，しかも，クラークのメッセージが伝えられた時から左程年数のたっていない事実上のクラークの同時代人としての発言は重い。ローランドの改訂版はさらに「知識に対して，正義に対して，かつ日本国民の向上のために be ambitious たれ。人間としてまさにかくあらねばならぬことのすべてを達成せんと be ambitious たれ。」と続く。

これらの切実な改訂版から，be ambitious が語感として持っていることが，次のように結論づけられよう。第一に，「キリストを求めんと，望みを高く持て」からは，be ambitious なり ambition には，本論の第3章でも言

及したように，本来的に上なるもの，絶対者なるものとの縦の関係性が全く欠けていることが再確認される。その種の関係性が欠けているからこそ，「キリスト云々」と補う必要があると感じた人が補筆したのである。第二に，「金，利己，はかなき名声を求むるの野心を燃やすことなく」という補筆からは，be ambitious とか ambition というのは本来的に「金，利己，はかない名声を求めること」に他ならないのだというローランドの本音が聞こえて来る。それだからこそ，その種の具体的な例をあげて，必死になって，それらのものを追い払わないではいられなかったのである。第三に，ローランドの「知識，正義，国民の向上のため」という条件も，それが凡そ be ambitious や ambition とは元来結びつかないものだからこそ，無理に書き加えないではいられなかったと考えられる。

9

大島正健が「大志」と訳したことは，教育者としての配慮からなされたものとして，それなりに理解はできる。「大望」とか「野心」や「野望」という訳語では，クラークのメッセージは決してあれ程に有名になったはずはなく，直ぐにも時の流れの中に沈んでしまい，忘れ去られたのではなかろうか。それに，日本語として比較的最近脚光を浴びつつ定着し始めたばかりの清新の語「大志」を訳語として当てたことは，さすが大島正健の卓見であったと言わねばならない。

「青年よ汝等は常に大志を抱き，国家有用の材たれよと先生は青少年に呼びかけられたのである。心なき人々が『青年よ野心家たれと叫んだクラークという男は怪しからぬ人間だ』などと申すのを時折り耳にするが，これは誤訳もはなはだしいのであって，先生はすべからく大抱負をいだき未来に夢を持てということを訓えられたのである。」(大島正健著前掲書 p.124)とあるのには，仲々複雑な問題が見え隠れしている。

第一に，大島が「誤訳もはなはだしい」と「心なき人々」を極め付けているが，もし，be ambitious を彼の恩師に対する絶大な敬愛の念や，自分

が教師としての学生たちへの教育的配慮を全く抜きにして，専ら語学的に考えた場合，それは決して誤訳ではなかった，むしろ，大島の訳こそ一種の「誤訳」であったと言わざるを得ない。

第二に，上の大島の「大志」を「誤訳」としたことに急いで修正，もっと厳密に言えば，微修正を加えなければならないのであるが，本論の第2章で論じたように，ambitious とか ambition という語は本質的に両義性を持っている概念であるから，その中に「大志」と訳して決して「誤訳」とは言えない要素が含まれていることは言うまでもない。ただ，語学的に厳密に検討した結果を基にすれば，それらの語には7～8割がたの「野心，野望」と2～3割の「大志」とが共に響き合っていると言えるであろう。ただ，この種の両義的な概念を一つの語で訳し，しかも，元の両義性を伝えるなどと言う芸当は限られた日本語では到底，無理なことであったのである。

第三に，大島が上掲の文で言っているように，それを「大抱負をいだき未来に夢を持てということ」と考えたのは，やや一面的であれ，正しい理解であったのだが，それらの思いを「大志」という一語で表現しようとした途端に，原語の両義性は失われてしまった。「大志」よりか，学生・安東幾三郎の選んだ「大望」こそがその語が生きていた当時にあってはより正確で適切な訳語であったと考えられる。

北海学園大学人文論集　第4号(1995年3月)

Ambition and "Taishi"

Shinichi TAKAKU

SUMMARY

"Taishi wo idake," the Japanese translation of William S.Clark's famed message, "Be ambitious" which is believed to have been given to his students of Sapporo Agricultural College as he left them back in 1877 for good, is now so well established among hearts and minds of the Japanese people that a minimum correction of or any improvement on the translation would be dismissed as a desecration.

However, the nuance of the English word is not properly conveyed by "taishi" because this Japanese concept is "aspiration" rather than "ambition" by definition, and it should have been translated more appropriately into "taimoh", then current and much closer to the English original. Masatake Ohshima, one of Clark's students who did hear Clark say the message and who made it public for the first time, deliberately chose this translation, I think, out of his reverent respect for his American teacher and out of his pedagogic consideration, he being teaching at his Alma Mater, of the influence the message must exert upon the Japanese young people.

"Be ambitious not for money or for selfish aggrandizement, nor for that evanescent thing which men call fame. Be ambitious for knowledge, for righteousness, and for the uplift of your people. Be ambitious for the attainment of all that a man ought to be. This was the message

of William Smith Clark," was an interpretation proposed in 1915 by Paul Rowland, a lecturer of English at the Preparatory Course of Sapporo Agricultural College (technically and more exactly the Faculty of Agriculture of the Tohoku Imperial University) as he shame-facedly felt "be ambitious" by itself sounded so bold-faced in its secularity that he, as Clark's compatriot as well as his spiritual and professional successor, could not resist offering what he believed Clark had meant. Paul Rowland's exposition of the Clark's message is, I think, an unmistakable evidence against the Japanese word "taishi" as an appropriate equivalent for "ambition" or "being ambitious".